



第55回（平成12年度）

日本セラミックス協会賞表彰

本会会員のうち、セラミックス産業の進歩発展に資し、本会および業界に対する功績顕著な方、セラミックスの科学技術の研究ならびに技術上の業績顕著な方に贈る日本セラミックス協会賞について、協会賞選考委員会（功労賞選考委員会、学術賞・技術賞・功績賞・進歩賞選考委員会）では、昨年来、被推薦候補者（功労賞は被推薦有資格者名簿から；学術賞19件、進歩賞11件、技術賞14件、功績賞7件）について慎重に選考の結果、第55回（平成12年度）受賞者として、次の方々を選び1月25日開催の理事会で25件の受賞者が決定した。ここに受賞者の業績推薦理由を紹介する。

なお、表彰式は、来る5月18日（金）東京（霞が関ビル内 東海大学校友会館）で開催される第76回通常総会の席上において行われる。

受賞者一覧

〔功労賞5件〕

元・群馬大学 潮 真澄
元・東陶機器(株) 神里達平
(有)ケイアンドエム 河上恭一郎
元・上智大学 岸岡 昭
元・(社)ニューガラスフォーラム 中川賢司

〔学術賞6件〕

東京大学 助教授 幾原雄一
東京理科大学 教授 竹中 正
大阪府立大学 教授 辰巳砂昌弘
産業技術総合研究所セラミックス研究部門
副部門長 渡村信治
名古屋工業大学 教授 虎谷秀穂
(株)豊田中央研究所 和田重孝

〔進歩賞5件〕

物質・材料研究機構 研究員 菊池正紀
産業技術総合研究所シナジーマテリアル研究センター
研究員 鈴木義和
京都大学 助手 高橋雅英
横浜国立大学 助手 多々見純一
慶應義塾大学 専任講師 藤原 忍

〔技術賞6件〕

佐賀窯業技術センター 特別研究員 一ノ瀬弘道
日本板硝子(株) マイクロオプトカンパニー
グループ代表 マーケティングディレクター

及川正尋

ほか 伊賀健一(東工大)・今井寿雄・谷口 敏
美濃窯業(株)

グループ代表 代表取締役社長 太田滋俊

ほか 本多 徹・日向義房・梶田吉晴

岡本硝子(株)

グループ代表 取締役 菊月康二

ほか 田中 進・湯 浩・加藤裕子

太陽誘電(株) 総合研究所

グループ代表 主任研究員 高橋 宏

ほか 藤本正之・関口象一

日本特殊陶業(株) 自動車関連事業本部

グループ代表 センサー事業部長 西尾兼光

ほか 川原一雄・山田哲正・早川暢博

〔功績賞3件〕

産業技術総合研究所 エレクトロニクス研究部門

主任研究員 岡 邦彦

兵庫県立工業技術センター 次長 河合 進

石川県九谷焼試験場 主任研究員 中道俊久

功労賞選考委員会 委員長：岡村鐘雄，委員：山内俊吉・宇田川重和・曾我直弘・柳田博明・一ノ瀬昇・平井敏雄・山岸千丈・水谷惟恭・永井正幸・国分可紀

学術賞・進歩賞・技術賞・功績賞選考委員会 委員長：水谷惟恭，委員：〔学術賞・進歩賞選考分科会〕大谷茂樹・高田雅介・山口明良・岡田 清・米屋勝利・平尾一之・森永健次・平田好洋，〔技術賞・功績賞選考分科会〕森田直文・米澤正智・津久間孝次・藤沢寿郎・田村信一・藤井清澄

Recipients of the 55th Awards of The Ceramic Society of Japan

注) 写真は日本セラミックス協会賞賞牌 (径7cm, 中央部厚さ1cm, デザイン 木村四郎氏)

功労賞
うしろ 潮 ますら 真澄氏



無機材料の合成に関する
基礎的研究と協会への貢献

潮真澄氏は、昭和35年山梨大学工学部応用科学科を卒業、昭和40年名古屋大学大学院博士課程修了後、同年同大助

手に奉職し、その後北海道大学、群馬大学に勤務した。この間、一貫して無機化学・材料化学分野の教育と研究に携わっている。

水熱法、高温高压法、スパッター、フラックス法など、また最近、過重力場および微小重力場利用により、多数の新規な無機材料を合成した。その研究方法は高度でかつ緻密であり、他の追従を許さないものである。特に、雲母類中のフッ素-水酸基含有量の $p-t$ 関係曲線に基づく地球化学的指標、高温高压法を用い、世界に先駆けたコバルトザクロ圧の合成とその安定領域の探求および新規な Co^{2+} イオンの八配位配置の分光学および磁気的研究、新触媒(Al-Fe(Crなど)系)によるcBNの低压低温合成、またフラックス法による結晶合成の場合、結

晶成長のみならず共存する高温融液との両面からの理論的研究など枚挙にいとまがない。

また当協会においても平成2年~11年評議員、同12年より正会員および平成9年~12年まで運営企画委員会委員、昭和63年~平成12年まで関東支部常任幹事、また支部長代行、支部研究発表会を主催した。

学術的研究とともに協会発展に対する貢献は多大であり、日本セラミックス協会功労賞の受賞に十分値するものとしてここに推薦する。

略歴 昭和35年3月山梨大学工学部応用化学科卒業。昭和40年3月名古屋大学大学院工学研究博士課程修了。同年4月名古屋大学助手。翌年4月北海道大学助手。昭和44年10月群馬大学助教授。平成9年教授。平成12年3月退官。工学博士。

功労賞
かみさと たつべい 神里 達平氏



衛生陶器および高精度セラミックスの
製造技術の開発と協会発展に関する貢献

神里達平氏は昭和33年東京大学理学部鉱物学科を卒業し、同年東洋陶器(株)(現、東陶機器(株))に入社、以来三十数

年にわたり研究開発に携わり、衛生陶器製造技術の向上および高精度セラミックスの開発・製品化に多大の業績を上げている。

その業績の第一は、衛生陶器原料に関するものである。国内外の天然原料を調査し、調製・成形・焼成の各工程で安定で特性の良い原料を選定し、衛生陶器製造技術の向上に大きく貢献した。

その第二は、高精度セラミックスの開発に関するものである。衛生陶器の鑄込み成形や焼成技術を生かし、半導体製造装置用の高精度な大型アルミナセラミックスを世界で初めて開発した。また高精度微小セラミックスの量産化も実現し、光通信用ジルコニア製コネクタについては世界有数の供給元になっている。

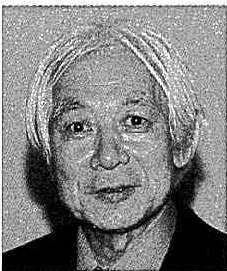
また、同氏は、昭和56年から平成7

年にかけて協会の評議員(8年)、理事(6年)を務め、さらに昭和63年から平成元年には原料部会副会長の責務を果たし、当協会の発展のために尽力した。

以上のようなセラミックス業界および協会への貢献に対し、日本セラミックス協会功労賞に十分値するものとし推薦する。

略歴 昭和33年3月東京大学理学部鉱物学科卒業。同年4月東洋陶器(株)(現、東陶機器(株))入社。同48年2月衛生陶器部長。同54年3月研究所長。同59年研究開発部長。同63年3月セラミックス事業部次長。平成4年3月商品企画副本部長。同6年3月基礎研究所主席研究主幹。平成7年3月同社退社。

功労賞
かわかみ きょういちろう 河上 恭一郎氏



工芸ガラスの発展に対する貢献

河上恭一郎氏は、昭和31年に東京芸術大学に在学中からガラスへの強い想いを持ち、昭和38年に(株)保谷クリスタ

ル硝子製造所(現、HOYA(株))入社以来、ガラスの器のデザインと製作に携わってきた。昭和41~42年にはスウェーデン、フィンランドに留学し、北欧のガラス工芸を学んだ。同氏の芸術活動については、コーニング美術館主催の“New Glass: A World Survey展”に入選、東京国立近代美術館、サントリー美術館での招待出品、“日本のガラス'87展”の入選、などに加えて、米国、イタリア、ドイツ、フランスの美術館での作品の展示など多岐にわたる。昭和62年からはガラス工芸家として独立し、ガラスの道を追い続けている。

日本セラミックス協会には昭和45年頃から工芸委員として活躍し、セラミックス誌の工芸欄を長年にわたり担当した。

以上のように、同氏は長きにわたって工芸ガラスのデザイン、製作に関わり、この分野の発展に大きく寄与した。また、当協会に対する貢献も多大であり、日本セラミックス協会功労賞に値すると考えられる。

略歴 昭和31年東京芸術大学工芸科图案部卒業。同年、松下電器(株)入社。本社宣伝部に勤務。同38年同社を退社、(株)保谷クリスタル硝子製造所(現、HOYA(株))入社、商品デザイン部に勤務。同61年退職。この間、同41~42年にJETROの海外デザイン研究員としてスウェーデン、フィンランド留学。

功労賞

なかしわか あきら
岸岡 昭氏



リン酸塩系セラミックス材料の科学・
技術とセラミックス教育への貢献

岸岡昭氏は、昭和33年高知大学文理学部理学科を卒業後、昭和39年上智大学理工学部理工学部に勤務し、以後34年間にわ

たりセラミックス材料の教育と研究に携わり、多くの人材の育成に貢献した。

同氏は、主にリン酸塩系セラミックス材料の研究において顕著な業績を上げている。特に、 Al_2O_3 または TiO_2 を含有する三成分系リン酸塩ガラスの研究において、 Al_2O_3 または TiO_2 によるガラス構造の強化について合理的説明を与え、さらに TiO_2 含有リン酸塩ガラスの中性子回折により結晶化相とガラス相の構造の類似性を明らかにした。なおその研究成果に基づき、低膨張性リン酸塩系ガラスセラミックスの開発に成功した。さらに関連するリン酸塩化合物の合成とその応用へと研究を展開し、優れた研究成果を上げ、リン酸塩系のガラスならびにセラミックスの科学・技術の発展に大きく貢献した。

同氏は当協会関東支部常任幹事、評議員を歴任し、協会の発展にも寄与した。

以上のように、同氏のリン酸塩系セラミックス材料の研究業績、およびセラミックス教育と協会発展への貢献は多大であり、日本セラミックス協会功労賞の受賞に値するものとして、ここに推薦する。

略歴 昭和33年3月高知大学文理学部理学科卒業。同年4月東京大学理工学部研究生。同35年日本電極(株)勤務。同39年4月上智大学理工学部助手。専任講師、助教授を経て、平成元年4月教授、同9年3月定年退任。同年4月～同10年同特別契約教授。工学博士(東京工業大学)。

功労賞

なかがわ けんじ
中川 賢司氏



光電子関連ガラスの技術開発
および産業界への貢献

中川賢司氏は、昭和32年4月に保谷クリスタル硝子製造所(現、HOYA(株))に入社以来、高屈折率低分散の光学ガラ

スの開発、白金をつばを用いた光学ガラスの製造技術の開発に続いて、ガラスの分相と結晶化ガラスに関する一連の研究開発を行い、学術的にもすぐれた成果を上げた。この中にはゼロ膨張の結晶化ガラスなどの開発が含まれる。これらの結晶化機構におけるガラスの分相の役割に注目して詳細な研究を行い、その業績により京都大学から工学博士の学位を授与された。

その後、光学ガラスの通電溶融技術、さらに磁気記録媒体用の化学強化ガラス基板の開発に携わった。現在、ノートブックPCの記録媒体にはすべてガラス基板が用いられるに至っている。

昭和58年からは(社)ニューガラスフォーラムの設立に参画し、また昭和53年～平成7年にわたり、当協会の評議員

としても活躍した。

以上のように、同氏は四十数年にわたり光学ガラス、電子用ガラスの開発に携わり、当該分野に多大な貢献を行った。また、ガラス産業界と当協会の発展に対する貢献も多大であり、日本セラミックス協会功労賞に値すると考えられる。

略歴 1957年新潟大学工学部応用化学科卒業。同年4月に保谷クリスタル硝子製造所(現、HOYA(株))入社。1975年技術研究所副所長。1981年工学博士(京都大学)を取得。1983年技術企画部長。1989年光アパイス研究所長。1992年技術担当理事を経て1995年(社)ニューガラスフォーラムに出向。1996年6月に同社を退社。

学術賞

いくはら ゆういち
幾原 雄一氏



セラミックス界面の超微細
構造解析とその応用

セラミックスの特性は、その粒界や界面におけるサブナノオーダーでの原子・電子構造と密接に関係している。した

がって、これを定量的に評価・解析し、粒界や界面を制御した材料設計が重要となる。幾原雄一氏は、粒界の解析手法の開発を行い、種々の構造・機能セラミックスに応用し、以下の研究成果を上げた。①超微細構造解析の研究では、特に非酸化物セラミックス特有の粒界構造を“拡張粒界説”によって説明し、高く評価されている。また、サブナノオーダーの界面の原子構造と電子状態を定量的に計測し評価する方法を確立し、セラミックスの超微細構造解析における新しい分野を開拓した。②粒界・界面物性関連の研究においては、金属/セラミックスなどの異相界面の原子・電子構造解析を行い、新しい概念を提唱して、国際的にこの分野を先導している。さらにこれらの手法を駆使し、セラミックスの粒界・界面制

御による原子・電子レベルからの材料設計の指針を得ている。以上のように同氏は、セラミックスの超微細構造解析や粒界・界面物性の分野において多大な貢献をなした。よって日本セラミックス協会学術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和63年九州大学大学院総合理工学研究科博士課程修了(工学博士)。(財)フィンセラミックスセンター試験研究所研究員、統括部長代理、主管主席研究員を経て、平成8年東京大学大学院工学系研究科材料科学専攻助教授、現在同工学部総合試験所助教授。平成3年～5年米国ケースウェスタンリザーブ大学客員助教授。JFCC客員研究員、科学技術振興事業団さきがけ研究21「秩序と物性」研究員。

学術賞
たけなか だせい
竹中 正氏



強誘電体セラミックスの圧電的・
焦電的諸特性に関する研究

竹中正氏は、多種にわたる強誘電体セラミックスの圧電的・焦電的諸特性に関する新しい分野を開拓した。

① ホット・フォーミング (HF) 法による粒子配向型ピスマス層状構造強誘電体セラミックスの強誘電特性は単結晶の90%の性質が引き出せることを計算し、それらを実験で確認した。縦結合電気機械結合係数 k_{33} は、粒子配向度 F が90%を超えると急激に増大し、横結合係数 k_{31} との異方性 k_{33}/k_{31} は F の増加とともにより強調され、また焦電性能評価指数は粒子配向により約2倍高められる等、粒子配向型圧電・焦電セラミックスの分野を開拓し、種々のピスマス層状構造強誘電体族の物理的・化学的諸特性を詳細に調べ、その広範な基本的資料を提供している。

② 環境にやさしい非鉛系圧電セラミックスの新しい分野を開拓した。従来のPZT系と異なる $(\text{Bi}_{1/2}\text{Na}_{1/2})\text{TiO}_3$ (BNT)

を主成分とする広範囲な多成分系固溶体の圧電的諸特性を詳しく調査した。非鉛系圧電セラミックスが実用化された場合、現用の鉛系のうち、特殊分野の高結合系を除いて、かなりの部分を代替できるので、地球環境向上において大変有効であり、その社会的意義は大きい。

略歴 昭和45年3月芝浦工業大学工学部電子工学科卒業。同48年3月電気通信大学大学院電気通信学研究所修士課程修了。同年4月東京理科大学理工学部電気工学科助手。同講師、同助教授を経て、平成8年4月より教授。この間、昭和61年8月米国ペンシルバニア州立大学材料科学研究所客員研究員(同62年8月まで)、昭和63年4月科学技術庁無機材質研究所客員研究員(平成9年3月まで)。1993年11月米国セラミックス協会(電子部門) Edward C. Henry Award (論文賞) 受賞。工学博士(京都大学)。

学術賞
たけみよこ まきひろ
辰巳砂 昌弘氏



高イオン伝導性非晶質固体
電解質材料の創製

安全でクリーンなエネルギー源である全固体電池の実現にむけて、優れた固体電解質材料の開発が強く望まれている。

辰巳砂昌弘氏は、融液超急冷法やメカノケミカル法を駆使して、イオンが固体中を高速で伝導する非晶質電解質材料を数多く創製し、応用への道を拓いてきた。以下にその研究成果を要約する。

① 147℃以上でのみ安定に存在する超イオン伝導体である $\alpha\text{-AgI}$ のガラスマトリックス中への常温凍結に世界で初めて成功し、その生成プロセスを解明した。

② Li_2S を含む硫化物系に少量オキソ酸リチウムを添加したオキシスルフィド系ガラスを数多く合成し、イオン伝導性、安定性、イオン輸率等の点で、優れた固体電解質材料であることを示すとともに、その構造を解明した。

③ 全固体リチウム電池用非晶質電解質の合成法として、直接微粒子を得ることのできるメカノケミカル法の優位性に

着目し、様々なオキシスルフィド系非晶質固体電解質微粒子の常温合成に成功した。

本研究で得られた独創的な研究成果は、国の内外から高く評価されており、日本セラミックス協会学術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和53年3月大阪大学工学部応用化学科卒業。同55年3月同大学院工学研究科博士前期課程修了。同年4月大阪府立大学工学部助手。平成3年1月同講師。同5年6月同助教授。同8年4月同教授(同12年4月より大学院部局化により大阪府立大学大学院工学研究科教授)。この間、昭和63年~平成元年米国パデュー大学、アリゾナ州立大学博士研究員。工学博士。

学術賞
とむら しんじ
渡村 信治氏



水を利用した陶磁器原料の精製・
合成と調湿材料開発に関する研究

21世紀を迎え、セラミックスをとりまく資源や環境は重要な検討課題となっている。渡村信治氏は、資源の枯渇化対

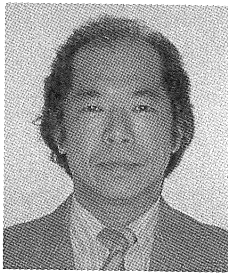
策の一環として粘土の精製・合成法の研究を、また、地球環境保全材料の観点から自律的な調湿機能材料を開発するなど優れた業績を上げてきた。以下に同氏の研究業績の概要を示す。①種々の天然原料について精査するとともに、粘土可塑性の相互比較法の考案、セピオライト原料の精製技術の開発、などの成果を上げた。②カオリナイトの効率的な合成法を確立するとともに結晶学的にも興味深い球状カオリナイトの合成に成功した。これらの合成技術は将来の可塑性粘土の枯渇に対して有効な対策技術として高く評価できる。③地球環境保全の一環として、電気エネルギーを使わずに自律的に湿度を調整できる材料の開発に成功し、さらにその機能発現機構を明らかにした。

以上、同氏の業績はセラミックス資源

や環境問題の研究の進展に基礎・応用の両面から貢献したもので、日本セラミックス協会学術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和50年3月東北大学理学部地学第二学科卒業。同54年3月同博士課程2年中退。同年4月名古屋工業技術試験所(現、産業技術総合研究所中部センター)入所。平成4年4月同セラミックス応用部原料技術課長。同13年4月産業技術総合研究所セラミックス研究部門副部門長。理学博士。

学術賞
とらや ひでお
虎谷 秀穂氏



放射光および実験室系X線を用いた
セラミックス材料の精密構造解析

虎谷秀穂氏は粉末回折法がセラミックスの構造解析・物性評価に極めて重要な手法であることに早くから着目し、装置と解析法の開発、およびその普及と応用

研究に努め、セラミックス研究の発展に寄与した。以下に同氏の研究業績概要を示す。

① 世界初の放射光粉末回折用多連装計数装置を開発し、PFにおいて我が国初の高分解能粉末回折ビームライン建設を主導した。これら装置は共同利用に供され、強誘電体、窒化物等の精密構造解析に使用されている。

② 格子定数精密測定、プロファイル関数のモデル化、パターン分解法、リートベルト法の精度の向上等、方法論と計算機プログラムを開発し、セメント鉱業等の粉末法による未知結晶構造解析、 α 型窒化ケイ素等の精密構造解析を可能にした。

③ パターンフィッティング法による定量法を提案し、方法の統計および系統誤差を理論的に解明し、定量精度を向上

させた。これに基づいて窒化ケイ素多型定量のラウンドロビンを実施し、定量法の標準化に努めた。これら成果はセッコウ等原料粉末の品質管理に应用されている。

以上、同氏の研究は多成分複合体であるセラミックスの精密な解析評価を可能にし、その成果はセラミックス研究の多方面で活用されている。この業績は国際的にも高く評価され、日本セラミックス協会学術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和47年東京教育大学理学部卒業、同52年東京工業大学総合理工学研究科修士、同55年同博士課程修了。同55年日本学術振興会奨励研究員。同56年東京工業大学工業材料研究所助手。同59年名古屋工業大学講師。同60年同助教授。平成7年同教授。平成元年4月から1年半IBMアルマデン研究センター客員研究員。理学博士。

学術賞
わだ しげたか
和田 重孝氏



窒化ケイ素セラミックスの
部品化を支援する基礎的研究

新製品の部品化に当たっては、目標性能をクリアするとともに安定に製造できる技術とコストの達成が重要である。そ

のためには、部品化を支援する基礎的知見の集積が必要である。和田重孝氏は窒化ケイ素セラミックスのエンジン副室やターボローターなどの部品化技術を開発するとともに、それを支援するプロセスと評価の基礎的研究を行った。

評価では、ローターの破壊に関連して、エロージョンの研究を行い、試料と砥粒の硬さの比が摩耗量に大きく影響することを明らかにした。また、 Si_3N_4 -SiC複合材料の高温酸化において、SiCが1000℃付近で異常酸化を助長することを見いだした。これらの成果は当協会論文誌掲載論文11報にまとめられている。

プロセスでは、窒化ケイ素の混合から焼結までの過程における酸素の挙動に着目し、特に、焼結過程における質量損失の機構を詳細に調べた。その結果、主反

応は Si_3N_4 と SiO_2 の反応によると結論し、その解決策を提案した。本研究の内容は当協会論文誌掲載論文7報として報告されている。

上記の知見は、特定の部品の実用化に限定して役立つものではなく、広く窒化ケイ素のプロセスや脆性破壊に関する学術上の基礎知識として有用である。よって、日本セラミックス協会学術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和36年名古屋大学理学部物理学科卒業。同年4月日本ガイシ(株)入社。同57年8月(株)豊田中央研究所入社。平成7年4月より豊田工業大学院博士課程客員教授兼任。同13年4月よりタイ国チュラロンコン大学客員教授。工学博士(大阪大学)。

進歩賞
きくち まさのり
菊池 正紀氏



無機・有機界面を制御した骨組織
誘導再生複合膜材料に関する研究

近年、膜状の生体材料を用いて、欠損した骨組織を再生する骨誘導再生法が注

目を集めている。従来、膜材料として有機高分子が利用されてきたが、骨誘導能が低く、機械的特性(弾性率)が十分でないことから5mm以下の骨欠損しか再建できなかった。一方で、リン酸カルシウム単体では、骨伝導能を示すが手術中に変形操作できる膜にできなかった。

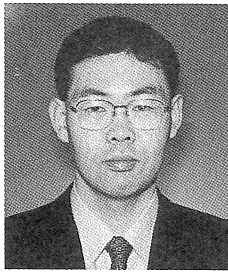
菊池正紀氏は、骨伝導能が高い生体吸収性材料である β -リン酸三カルシウムと生分解性高分子であるポリ乳酸系共重合体を複合化し、柔軟で骨誘導再生能をもつ膜材料の開発に成功した。同氏は有機・無機材料の界面で化学結合が形成されることを見だし、体温付近で骨に近い強度をもち、50℃の加温により成形可能な膜材料の開発につなげた。さらに、本複合材料は従来の吸収性材料と異な

り、リン酸カルシウムと高分子の緩衝作用により周囲のpHは中性に保たれる。また、20mm以上の骨欠損を治癒し、材料自身は一年以内に吸収されることから、大型骨欠損の治療材料として、現在企業にて商品化が進んでいる。以上のように同氏の業績はセラミックスの複合化技術と生体材料開発の二つの視点から高く評価できる。

略歴 平成2年早稲田大学工学部資源工学科卒業。同4年同大学院理工学研究科修士課程修了。同7年同大学院理工学研究科博士後期課程修了。同年4月同理工学総合研究センター客員研究員(同10年3月まで)。平成7年10月無機材質研究所(現、物質・材料研究機構)入所。現在に至る。工学博士。

進歩賞

すずき よしかず
鈴木 義和氏



その場プロセスによるセラミックス
複合材料の創製に関する研究

構成相の合成と焼結を同時に行う「その場 (in-situ) プロセス」は、微構造制御、高性能化および低コスト化を目的と

したセラミックスの製造法として期待されている。鈴木義和氏は、その場プロセスにおける固相反応過程や微構造形成過程を精密に制御し、構造安定性と機能性に優れた新規複合材料を創製した。その成果を以下に要約する。

① その場プロセスで、気孔径が制御された低熱膨張の CaAl_2O_7 および $\text{CaAl}_2\text{O}_7/\text{CaZrO}_3$ 複合材料を開発した。ドロマイト、ジルコニアおよび微量のフッ化リチウムから、気孔分布の狭い $\text{CaZrO}_3/\text{MgO}$ 多孔体を創製した。

② 構造と機能が調和した CaZrO_3 多孔体では、高温脱塵と同時にメタンガスの検知が可能であることを見いだした。

③ ナノサイズ強磁性フェライト粒子をジルコニア中に均一に分散させ、磁気特性と機械的特性が両立できることを示

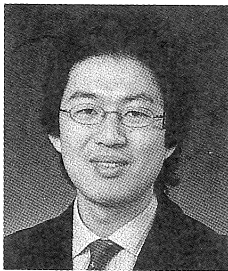
した。

以上のように、同氏はその場プロセスによる複合材料の創製に関して、先駆的かつ重要な研究成果を上げており、日本セラミックス協会進歩賞に値するものとして推薦する。

略歴 平成5年3月大阪大学工学部応用精密化学科卒業。同7年3月同大学院プロセス工学専攻博士前期課程修了。同10年3月同大学院物質化学専攻博士後期課程修了。同年4月通商産業省工業技術院名古屋工業技術研究所入所。同13年4月産業技術総合研究所シナジーマテリアル研究センター(改組)、研究員、工学博士。

進歩賞

たかはし ままひで
高橋 雅英氏



光機能性ガラス材料の構造と
物性に関する研究

波長変換機能や非線形光学特性を有するガラス材料は光通信系や光情報処理系フォトニックデバイスへの応用が期待さ

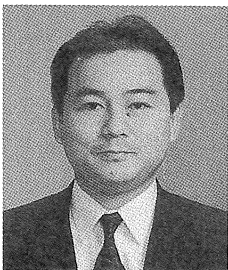
れている。高橋雅英氏は、主として長波長光を短波長光に変換する種々の光学機能ガラスを熔融法、気相法、ゾル-ゲル法などの異なる手法で合成し、それらのガラスの比較からアップコンバージョンおよび第二高調波発生の機能発現に対し重要な基礎的知見を見いだしている。その成果の主なもの、①化学的耐久性と高いアップコンバージョン特性を示す酸フッ化物結晶化ガラスの開発に成功し、分子動力学計算手法を用いて希土類イオンの局所構造と光機能特性の関係を明らかにした。②シリカ系ガラス材料の非線形性誘起・フォトリフレクティブ効果に寄与する紫外線誘起化学反応の新たな反応経路として、 Ge^{2+} の関与した反応経路を提唱し、ゾル-ゲル法により作製した欠陥状態を制御したガラスを用いて、

この反応経路の実証に成功している。これらの成果は今後期待されるこれらのガラス材料の開発に指針を与えるとともに、ガラスの基礎科学的にも重要な知見であり、日本セラミックス協会進歩賞に値するものとした。

略歴 平成3年神戸大学理学部化学科卒業。同8年神戸大学大学院自然科学研究科物質科学専攻修了。同年豊田工業大学大学院工学研究科博士研究員。同9年神戸大学ベンチャービジネスラボラトリー研究員。同10年より京都大学化学研究所助手。理学博士。

進歩賞

たまたみ じゅんいち
多々見 純一氏



セラミックスの機械的特性向上
のための微構造設計・制御

多々見純一氏は、セラミックスの機械的特性向上のための構造設計と制御に関する研究を行った。初めに、き裂進展経

路に着目して多結晶セラミックスの破壊靱性に関する基礎理論を提案し、 Al_2O_3 を用いてその理論の妥当性を検証した。理論解析の基礎データとなる Al_2O_3 の粒内および粒界の破壊靱性を単結晶とバイクリスタルを用いて評価し、それらが結晶方位と粒界構造に依存することを明らかにし、国内外で高く評価された。さらにこの理論を、 Sm_2O_3 や La_2O_3 の添加された AlN に適応し、破壊靱性の向上が粒界強化に起因していることも明らかにした。さらに、 Si_3N_4 のトライボロジー特性を球状圧子圧入法を用いた接触損傷挙動によって評価し、 Si_3N_4 の粒界に TiN を分散させることにより、繰り返し圧子圧入時のき裂発生・進展と強度劣化が抑制されることを見いだした。また、セラミックスの微構造制御を目的とし

て、 $\text{Ca-}\alpha$ サイアロンナノ粉末の合成と焼結、 Si_3N_4 の HfO_2 添加による結晶化、PVD 法による Si_3N_4 上への TiN 被覆と界面制御などの研究も行っている。以上の業績は、日本セラミックス協会進歩賞に十分値するものとして推薦する。

略歴 平成4年3月東京工業大学工学部無機材料工学科卒業。同9年3月同大学院工学研究科博士課程修了。同年4月日本学術振興会特別研究員。同年12月横浜国立大学工学部物質工学科助手。同13年4月同大学院環境情報学府環境システム学専攻助手。工学博士。

進歩賞
ふじはら しのぶ
藤原 忍氏



ゾルゲル法による機能性フッ化物材料の創製に関する研究

種々の興味深い物性を有する金属フッ化物に対して新規材料探索するためには、簡便かつ安全な合成手法の確立が必

要である。藤原忍氏は、そのための新規ゾルゲルプロセスを考案し、フッ化物の生成機構、電気・光学特性の解明と酸化物/フッ化物複合体の創製研究に優れた業績を上げてきた。以下に同氏の研究業績の概要を示す。

① 金属フッ化物の生成機構を解明し、酸化物/フッ化物複合体の設計指針を構築した。

② 酸化物/フッ化物複合体超伝導粉末および薄膜の合成に成功し、それらが優れた磁場特性を示すことを見いだした。

③ 多孔質のアルカリ土類フッ化物薄膜を作製し、屈折率制御に成功した。

④ LaF_3 微結晶を分散した透明なシリカガラスおよび強い可視発光を示す ZnO ナノ結晶を分散した MgF_2 薄膜の創

製に成功し、新規な発光材料としての可能性を示した。

以上のように同氏の研究は、広くフッ化物セラミックスおよび酸化物/フッ化物複合体の科学技術の進展に貢献するものであり、日本セラミックス協会進歩賞に値するものとして推薦する。

略歴 平成2年3月京都大学工学部工業化学科卒業。同4年3月同学大学院工学研究科分子工学専攻修士課程修了。同7年3月同博士後期課程修了。同年4月慶應義塾大学理工学部応用化学科助手。同12年4月同学専任講師。工学博士。

技術賞
いちのせ ひろみち
一ノ瀬 弘道氏



ペルオキシチタン系コーティング剤の開発と実用化

現在までに光触媒作用を示す二酸化チタンは、種々の方法で製造されてきたが、低温コーティング、密着性、透明性、各

種材料への適応性に技術的問題があった。一ノ瀬弘道氏はこれらの問題を解決し、光触媒コーティングの技術を実用レベルまで向上させた。以下にその業績を示す。

まず、無機チタン塩を出発原料に、ペルオキシチタン酸溶液と同水和物を經由したペルオキシ改質アナターゼゾルの合成技術を開発した。さらに、ペルオキシチタン水和物を經由した同チタン酸溶液の合成技術を開発した。

そして、ペルオキシ改質アナターゼと同チタン酸溶液の特異性に着目し、光触媒コーティング剤への応用を図り、ペルオキシ改質アナターゼゾルと同二酸化チタン粉末の複合膜によって光触媒活性の改善、ペルオキシチタン酸溶液と改質アナターゼゾルの2層コーティングによる

有機物上への耐紫外線性光触媒膜の形成へと発展させた。さらにペルオキシ改質アナターゼゾルと同チタン酸溶液とそのスプレー缶の製品化および実用化に貢献したもので、日本セラミックス協会技術賞に値するものである。

略歴 昭和54年3月佐賀大学理工学部工業化学科卒業。同55年4月佐賀県窯業試験場(現、佐賀県窯業技術センター)研究員。平成4年4月同特別研究員、現在に至る。この間、平成7年3月佐賀大学大学院工学系研究科博士後期課程修了。工学博士。

技術賞
おいかわ まさひろ
及川 正尋氏



光通信用プレーナマイクロレンズ

光通信用プレーナマイクロレンズは、ガラス基板表面に多数の微小なレンズを高位置精度で規則正しく配列した、い

わゆるレンズの集積回路であり、半導体プレーナ技術を応用した選択的イオン交換によって実現される。本発明は伊賀健一氏の発想に基づいて昭和54年から研究され、日本板硝子開発グループにより製品化された。平成7年頃からのインターネットの普及に伴って、光通信容量の需要が急激に増加し、並列光通信技術の実現が重要な課題となった。同グループは、半導体レーザーアレイからの多数のレーザー光をテープ状の光ファイバーアレイに一括して効率よく結合するため、高開口数の集積レンズアレイを開発し、並列光通信モジュールとして実用化に成功した。今後は、大規模な実用化が始まった高密度波長分割多重システムにおいて必須とされる光クロスコネクタ用マトリックススイッチへの応用も期待さ

れている。

世界的にも類のない独自の発想を基にして行われた長期の研究開発と企業化の取り組みを高く評価し、日本セラミックス協会技術賞に値するものとして推薦する。

略歴 昭和54年茨城大学工学部電子工学科卒業。同59年東京工業大学大学院総合理工学研究科修士課程修了同博士課程修了。同年日本板硝子(株)入社、筑波研究所配属。平成4年日本板硝子(株)光事業部 営業部に移籍。現在、日本板硝子(株)マイクロオプトカンパニー マーケティングダイレクター。

同グループのメンバー 伊賀健一(東工大)、今井寿雄、谷口 敏

技術賞
おた しげとし
太田 滋俊氏



セメントロータリーキルン用クロム
フリー塩基性耐火物の実用化

セメントロータリーキルンの高温安定
操業を維持するため、従来のマグネシ
ア・クロム質耐火物は高耐食性を示す優

れた耐火物であるが、クロム含有による
環境上の問題等が注視されてきた。太田
滋俊氏は、この問題を解決すべく、マ
グネシア・スピネル質耐火物の安全性、
安定性に着目した。しかし、この耐火物
はセメントコーティング層が形成し難い
こと、耐食性が不十分であることなどの
問題点を有していた。対策として Fe_2O_3
や Al_2O_3 を適正に添加することにより、
保護コーティング形成と侵食抵抗性の向
上に成功し、セメントロータリーキルン
の焼成帯において、機械的、化学的およ
び熱的に最も過酷な真焼域に使用できる
優れた耐火物の実用化を果した。さらに、
厳しい条件で使用し得る耐火物として、
低膨張性や優れたコーティング特性を有
する $CaZrO_3$ を主成分とした $MgO-CaO-$
 ZrO_2 質塩基性耐火物を開発し実用化を

達成した。以上のマグネシア・スピネル
質耐火物と $MgO-CaO-ZrO_2$ 質塩基性耐
火物は、国内で2000t/年以上、海外で
は1992年以降8000t以上が使用され、
環境対策へ大きく貢献しており、日本セ
ラミックス協会技術賞にふさわしいもの
として推薦する。

略歴 昭和51年成蹊大学工学部工業化学科
卒業。同55年東京工業大学大学院材料科学専
攻博士課程修了。工学博士。同年美濃窯業(株)
入社。同60年1月より同社研究開発部長。同
62年6月より同社取締役。平成元年6月より
同社常務取締役。同5年6月より同社専務取
締役。同11年6月より同社取締役社長。

同グループのメンバー 本多 徹、日
向義房、梶田吉春

技術賞
きくづき こうじ
菊月 康二氏



結晶化ガラスを用いた反射鏡

平面ディスプレイのひとつである液晶
プロジェクターは、高輝度光源の発展お
よび液晶を利用したことで、著しく明る

くかつ高精細な映像を楽しむことを可能
にした。この技術を支えているのが、コ
ールドミラー付き反射鏡である。本受賞技
術の対象製品は、従来使用されていた耐
熱ガラスに替わり結晶化ガラスを開発す
ることで実現した高耐熱・高信頼性の反
射鏡である。その結晶化ガラスは、
 $LiO_2-Al_2O_3-SiO_2$ 系のゼロ膨張ガラスで
あり、高輝度ランプの反射鏡として世界
に先駆けて開発されたもので、高耐熱
性・照度・高靱性など現在世界最高の特
性を有した反射鏡を提供した。しかも、
ゼロ膨張でありながら約1300℃という
低い温度でプレス成形が可能な材料であ
るということは他に例を見ない。菊月康
二氏は、この開発を意欲的に推進して
きた。その結果、本製品は全世界のプロ
ジェクター用反射鏡の60~70%という

高いシェアを占め、そのシェアも年々増
加している。1999年の反射鏡の出荷量
は約70万本であり、2000年は150万本
が予測されている。

以上のごとく、本技術は、日本セラミッ
クス協会の技術賞にふさわしいものとし
て推薦する。

略歴 昭和55年3月東京理科大学理工学部
工業化学科卒業。同年岡本硝子(株)入社、研
究室勤務、ガラス組成の研究、表面処理の研
究に従事。平成8年マルチコート事業部長、
同10年開発グループリーダー兼任。

同グループのメンバー 田中 進、湯
畑 浩、加藤裕子

技術賞
たかはし ひろし
高橋 宏氏



超小型高周波用積層セラミッ
クスチップインダクター

高橋宏氏はレーザー工法を用いて、
世界で初めて高周波用超小型積層セラ
ミックスチップインダクターの開発・量

産化に成功し、携帯電話の小型・軽量化
の実現に大きく貢献し、日本のセラミッ
ク電子部品の技術的な先進性を世界に示
した。以下に主な業績を要約する。

① 携帯電話の小型化には従来技術の
空芯コイルやプリントインダクターでは
不可能であり、積層技術により超小型化、
高品質係数、インダクタンス値の安定化、
自動実装ならびに大量生産を実現した。

② 低温焼成低誘電率ガラスセラミッ
クスを開発し、高電気伝導度の銀内部導
体の同時焼成で、高い品質係数、性能の
安定化を実現した。

③ 機械加工にかわる、レーザー加工
法を開発した。この技術では保持フィル
ムへダメージを与えずに、数 μm の薄い
ガラスセラミックシートに直径50 μm
以下の微少スルーホールを1秒間に1万

個以上形成することができ、大量生産を
可能とした。

④ 超小型形状(1005)で500nHま
での値を実現し、2000年度は100億個
以上の生産規模となっている。

略歴 昭和56年群馬大学工学部機械工学科
卒業。同年4月太陽誘電(株)入社。アキシ
ャルリードインダクター小型化開発に従事、海
外生産拠点での生産技術展開を終了後、レー
ザーマイクロ加工技術による積層チップイン
ダクターの開発と生産技術を担当。平成8年
総合研究所副主任研究員、同10年主任研究員。

同グループのメンバー 藤本正之、関口
象一

技術賞
にしき かねみつ
西尾 兼光氏



ジルコニア酸素センサーの開発と製品化

西尾兼光氏は、内燃機関の理論空燃比燃焼制御用センサーとして、ジルコニア固体電解質素子とセラミックヒーター

を組み合わせた酸素センサーを開発製品化し、排気ガス規制の時代のニーズに応える信頼性ある酸素センサー量産品として世界一の生産量を達成した。

ジルコニアはそのままでは結晶転移により体積変化を生じ、強度上問題となり、電気伝導性も小さい。この転移をなくするため Y_2O_3 を固溶させ、自動車排気系の過酷な熱、振動、衝撃に耐え、高強度で電気特性を満足する固体電解質素子を開発した。さらに素子表面に白金電極を密着させ、耐被毒性向上のためプラズマ溶射スピネル層を被覆させ、長期信頼性のある酸素センサー素子を完成した。さらにジルコニア固体電解質の酸素ポンプ特性を生かしたセンサーとして、ジルコニアの積層焼成からなる、リッチ域からリーン域の空燃比まで検出できる世界初

の全領域空燃比センサーの開発に成功した。

これは、希薄燃焼、精密理論空燃比制御に活用され、省資源、温暖化防止と、より厳しい排ガス規制適合で、地球環境保全に大きくするもので、日本セラミックス協会技術賞に値するものである。

略歴 昭和38年名城大学理工学部電気工学科卒業。同年日本特殊陶業(株)入社。以後プラグ技術部にてプラグの技術関係業務に従事し、同60年プラグ技術部長、平成5年より取締役センサー事業部長。同9年常務取締役自動車関連事業本部技術開発本部長。同11年専務取締役米国センサー社長。現在自動車関連事業本部副事業本部長。工学博士。

同グループのメンバー かわはらかずお やまだ 哲正、早川暢博

功績賞
おか くにひこ
岡 邦彦氏



酸化物超伝導体単結晶育成技術の研究開発とその普及指導に関する功績

岡邦彦氏は1969年に電機試験所(改称、電子技術総合研究所)に入所以来、三十有余年にわたり、超伝導体、磁性体、

誘電体などの酸化物の状態図作成ならびに結晶成長の研究・開発、その成果の指導と普及に従事し、多大な功績を上げた。以下に特筆される成果を要約する。

① 酸化物超伝導体の分野では、発見された当初の情報が皆無なときに、状態図や結晶育成技術などに先駆的な成果を上げ、数多くの重要な情報を発信した。これによって多くの研究者に物質開発の道筋を示し、現在も重要な物質系として超伝導研究の発展に顕著な貢献をしている。即ち、内外の多数の研究者の要請に応じて、種々の良質な単結晶を開発し、共同研究者として提供し、物性研究分野でも多くの成果を上げ、世界から非常に高い評価を得ている。

② 企業、大学、海外研究機関等からの多数の研修生を受け入れ、開発した技

術を全面的に開示し、セラミックス作製や結晶育成の技術指導普及に努めた。当協会セラミックス誌編集委員、無人宇宙実験システム開発機構技術委員および国際会議委員等を歴任し、セラミックス分野の発展、人材育成、技術の啓蒙普及に大きく貢献した。

略歴 昭和44年3月工学院大学電子工学科卒業。同年4月電気試験所(改称、電子技術総合研究所)を経て現、産業技術総合研究所)入所。同60年10月より同所主任研究官。この間、昭和52年3月法政大学大学院修士課程修了。平成2年~3年アムステルダム大学ファンデルワールス・ゼーマン研究所客員研究員。工学博士。

功績賞
かわい すけひこ
河合 進氏



陶磁器用原料資源利用技術の開発と業界指導

河合進氏は昭和45年兵庫県立工業技術センター(旧、兵庫県立工業試験場)に勤務して以来、30年にわたり、陶磁器

製造技術の試験・研究に従事し、淡路、出石、立杭など兵庫県下のセラミックス業界の指導・育成に大きく貢献した。以下にその業績を要約する。

①我が国を代表する粘土瓦のひとつ淡路粘土の高品質化のための原土処理技術および頁岩粘土などの未利用資源利用技術を開発し、製品品質向上に貢献した。さらに、加圧脱水成型法による大型平板瓦の製造技術を開発し、新製品開発にも貢献した。②出石陶石の精製技術の基礎研究と、江戸時代から昭和初期の主原料である飛谷石の再発見で、新しい飛谷出石焼の製品開発に貢献した。③丹波立杭焼の主原料である四辻粘土などの基礎研究と未利用粘土利用技術の確立で、原土問題の解消に寄与した。④陶磁器用原料、釉薬の分析・評価技術についての業界指

導および当協会評議員として陶磁器業界の発展と啓蒙活動に貢献した。

以上、同氏の関西地域セラミックス業界の振興と発展に貢献した功績は誠に顕著であり、功績賞にふさわしいものとして推薦する。

略歴 昭和44年3月大阪府立大学工学部応用化学科卒業。同45年6月同大学院工学研究科修士課程中退。同年7月兵庫県立工業試験場(現、兵庫県立工業技術センター)入所、窯業部勤務。同55年9月主任研究員。無機化学部、普及指導部、化学部、開発部、企画情報部、無機材料部を経て、平成11年4月無機材料部次長。

功績賞
なかみち としのり
中道 俊久氏



九谷焼に用いる素地，釉，上絵具の研究開発と技術指導

中道俊久氏は、昭和58年9月に新設された石川県九谷焼試験場に勤務して以来、九谷焼磁器の素地，釉，上絵具等の

素材の開発と、九谷焼業界に対する技術指導等に貢献した。以下に主な業績を要約する。①九谷焼磁器素地の高品質化を図るため、透光性および白色度に優れた磁器素地の開発を行い、業界に技術移転した。この素地は平成2年に宮内庁で執り行われた即位礼饗宴の儀に用いられた。②九谷焼発祥以来、九谷焼業界にとって大きな問題であった上絵具の剝落防止に対し、従来の釉の熱膨張係数だけでなく、釉の軟化点が密接な影響を及ぼしていることを解明し、軟化点を上げた釉を開発した。業界では、この組成の釉を採用したため、製品歩溜まりが向上し業界に大きく貢献した。③鑄込み成形素地の厚み方向による不均質性を蛍光X線分析法を用いて解明し、泥漿の水分調整により改善できることを明らかにした。④陶

磁器業界にとって、大きな問題である上絵具の鉛溶出問題に対し、無鉛絵具の実用化試験を行っている。以上のごとく、同氏が九谷焼業界の振興と発展に寄与した功績は顕著であり、日本セラミックス協会功績賞に値するものとして推薦する。略歴 昭和45年3月金沢大学理学部地学科卒業。同47年3月金沢大学大学院理学研究科修士課程修了。同年4月東京窯業(株)(現、株)TYK。同56年4月石川県工業試験場。同58年9月石川県九谷焼試験場。同10年4月同主任研究員。平成11年3月金沢大学大学院自然科学研究科博士課程修了。理学博士。

日本セラミックス協会の協会賞選考について

1. はじめに

当協会には協会賞として、功労、学術、進歩、技術、功績の5賞があります。その他に特別会員技能者を対象としたセラミックス賞があります。学術、進歩、技術、功績の4賞は協会会員から公募し、応募者に対して公平に説明する機会が与えられます。

そこで、応募者がご自身の業績を十分説明できるように、応募書類や説明方法について最近の選考で気が付いたことを述べることにします。

2. 選考書類

公募の4賞には会員歴や年齢などに制限があります。途中退会期間があれば、その期間は会員歴から除かれます。また、年齢は応募時ではなく、受賞年の4月1日をもって計算します。

応募は支部、部会からの推薦のほか、個人会員5名の連名でも推薦できます。なお、選考委員は個人の資格で推薦者になることはできません。応募書類はまず指定された申請書、および指定された事項を書いた添付書類をまとめて、応募します。事務局では会員歴や年齢がセラミックス協会賞規程を満足しているかをチェックします。応募者は選考委員会の説明会で使用する業績説明用の書類(通常は当日使用するOHPのコピー、人によってはOHPの簡単な説明文の添付)を選考委員会での説明会開催の1か月以上前に事務局に提出します。

3. 選考委員会

協会副会長が選考委員長となり、選考委員候補者を主に既受賞者の中から選びます。しかし、応募がある以前に選ぶので、どのような応募にも対応できるように分野や地域、所属などが全国的にみて、なるべく広くなるように選んでいます。

委員は学術・進歩賞8名、技術・功績賞6名の委員で、兼務はしません。委員長は両方の委員会の議長になり、選考法の確認や選考委員会の司会、および全賞にわたっての人数の調整(ほとんどないが)をします。選考の投票に加わるか否かは、その時の選考委員会の委員で相談し

て決めています。委員の任期は学術・進歩賞は2年、技術・功績賞は3年であり、前者は半数、後者は1/3ずつ毎年交代しています。しかし、委員の都合で任期途中の交代もあるので、1年の方もおられます。選考委員は協会の理事会で承認され、会長より正式に委嘱されます。委員名は受賞者の発表と同時に毎年公表されます。選考に関する問い合わせは事務局にお願いします。

4. 選考方法

応募が締め切られると第1回の委員会を開催し、選考方法の確認と応募書類が開示され、全委員に配布されますが、各応募者ごとに特に詳細に検討する審査担当者(正、副の2名)を決めます。さらに、説明用OHPコピー等の資料も全委員に配布され、全員がこの二つの資料を基に各自1か月近く検討し、説明会での質問事項や委員会での協議事項を考えます。

5. 業績説明会

二つの委員会は別々の日にそれぞれ丸1日かけて、応募者の業績説明をききます。委員長と全委員が出席し、説明は1人14分(発表9分、質問5分)で交代に1分間を考慮していますので、15分ごとに説明者がかわります。発表時間がオーバーすると途中で打ち切り、全応募者に公平になるようにしています。

説明にはOHPの他に製品やサンプルを持参する人もいます。質問は全委員から行われますが、OHPのコピーが事前に配布されていますので、それに沿って行われます。業績説明の順番はランダムに決めています。

6. 選考

学術、進歩、功績賞は、委員全員の総合評価の合計点により、技術賞に関しては、新規性・獨創性、技術力、経済効果で、それぞれ評価を点数にし、委員全員の合計点により、順位を決めます。この順位を基に全委員であらゆる角度から検討して、定員数内で受賞候補者を決め、会長に推薦します。会長は推薦された受賞候補者を、理事会に諮り、その承認を得て受賞者を決定します。

7. 応募上の注意

選考は提出された書類と、選考会での説明の両方から決定されます。委員が本人や関係者に問い合わせることはありません。また、最近では応募者が多いので、委員は短期間にかかりの量の書類を精読することになります。

提出される書類については内容と表現に十分考慮して作成されること、また説明会で時間が不足することが多いので、予め練習されることを望みます。功績賞以外は本人説明ですが、功績賞は本人ではなく、推薦者が行うので、内容等十分準備されることを望みます。

応募書類は説明会の2か月前、説明会用OHPコピーは1か月前に提出することになるので、提出にあたっては前もって周到に準備されることが大切です。また、選考にあたっての重点内容が応募要領に示されているので、これらに対応する構成と内容の書類や説明にも留意下さい。

また、平成12年度受賞者からは学術賞は総合論文を当協会学術論文誌に書くこと、進歩賞は協会の年会や秋季シンポジウムでの受賞講演、また技術、功績賞は受賞内容をセラミックス誌に書くことが義務づけられています。是非、これらの論文や発表も参考にして下さい。

8. 最後に

協会賞への応募者が多いことは協会の活性化にはすばらしいことです。一方、セラミックスの分野も拡大し、評価が困難なこともあります。選考委員会は夜8時頃までに及ぶこともありますが、委員の方々は疲労よりも選考の難しさに思いを巡らすこととなります。特に技術賞や功績賞はその受賞基準には色々な切り口があります。より多くの方々の努力が評価されるように選考法や新たな賞の創設、すぐれた研究や業績の発掘などの工夫を進めています。前述したように、協会賞が一般会員にもよく理解していただき、会員にとっての示唆や参考になるように論文や発表などを通して公開していくことにしています。

(平成12年度選考委員会委員長 水谷惟恭)